



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歡のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。



「—」といった丸山金治の繊細な描写と一緒にあの町の辺りを歩いた日の光景がよみがえるのである。
岡崎さんは丸山金治の小説は浄瑠璃を身にまとった新感覚派と解釈しているが、鑑賞力、古本発掘の眼力に感服しながら、あの小説集はいつどこで失ったものかと、淡い古びたような恋情が懐旧の思いと交じわりながら胸底に去来するのであった。
(自分史図書館長)



私の稀観本ノート その6

椎窓 猛

「四人の踊り子」
古本探訪家として近頃高名な岡崎武志さんの著書に関心を抱くようになったのは「古本病のかかり方」(東京書籍刊)を読んで以来のことである。書店で面白い表題だと思いがら手にとり、めくっていると「丸山金治という男」との一章が目飛びこんできた。「ほう、これは—」とばかり魅きつけられたのである。
実は20代の文学青年時代、この作家の「四人の踊り子」という創作を読んだ思い出がある。昭和23年3月創刊の「改造文芸」に掲載されていて、新鮮な作品という印象を受けた。この号には横光利一追悼特集としても編集されていた。横光利一は昭和22年12月、50歳で亡くなっている。この雑誌の定価は70円。丸山金治の小説は「四人の踊り子」との表題で単行本にまとめられ出版され、これも買った記憶があるが、青春流浪転々の中に何処かで失っている。たゞわれなから不思議なことに「四人の踊り子」掲載の雑誌だけは所持し続けてざつと57年余。あの頃、私は練馬に住んでいた。「陽ざしが落ちると風が凍って、寒さが背筋へ沁み通る

山泉煎茶有懐
中唐 白楽天
山泉にて茶を煎て懐い有り
坐酌冷冷水
坐して酌む冷冷水
看煎瑟瑟塵
見て煎る瑟瑟の塵
無由持一盞
一盞を持して
寄与愛茶人
茶を愛する人に寄与する由無し

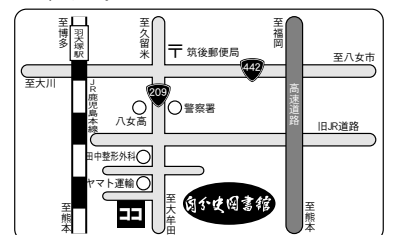


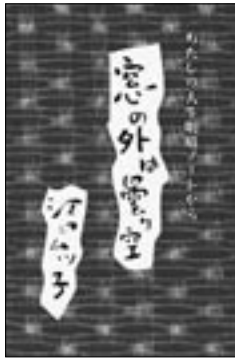
杭州春望 白楽天

○江南漢詩紀行 牛島景資

牛島さんは豊晃吟道会師範で、吟号は豊昇と称されている。八女市在住。漢詩のふるさと中国を歴訪すること20回余、ここには漢詩75首が紹介されているが、詩跡を歩み、まとめられた紀行文とあわせての鑑賞だけに文章に奥ゆきを感じとる。
牛島さんは、詩吟は「詩中の人となれ」といい、奥深い漢詩の魅力、その所以を説かれている。ここに白楽天の「煎茶有懐」を挙げてみたが八女茶の産地と照合しながら読みとってみたいものである。

開館 午前9時～午後5時 入館無料
休館 土曜・日曜、祝祭日、年末・年始、その他
休館することがあります。予めご確認下さい。





○窓の外は曇り空
江口 ムツ子

縞模様の装幀がめずらしく愛着を感じるエッセー集である。江口ムツ子さんは人生史サークル『黄櫨』の創刊号以来の会員で、毎号欠くことなく作品を発表されてきた。その集積と母堂への鎮魂歌が一冊、記念の上梓となった。

「明治44年母が九歳になった時、祖父が死んだので子守奉公に――。小さな身体に大きな子供をおんぶ。大きな銀杏の木がそびえる校庭へ遊びにゆく。教室からオルガンの音」こんな行間に江口ムツ子さんの母上への鎮魂の調べが重なるのである。



○南十字に夢は尽きず
渡邊 要三

福島県の一農家に生まれた渡邊さんは18歳で志を立てて当時の満州へ。昭和10年奉天機関区勤務。だがこの新天地の現実と夢とはほど遠く失望、帰国。警察官、それから兵役。「私の末弟ほどの若者からピンタを受けた」中国大陸戦線へ。「越を往くボロボロの兵山笑ふ」ハノイの病院で敗戦の日を迎えた。昭和29年、ブラジル渡航。怨恨をすてて渡ったブラジルには差別がなく、果物の宝庫。渡邊さんはこの大陸で胡椒栽培。さらには養鶏も。80歳を迎えて、人生の運命的な軌跡を書きあげたとよろこびの結び。



○戦艦大和が沈んだ日
八杉康夫聞き書き

昭和2年、広島県福山に生まれた八杉康夫さんは今77歳。大竹海兵団入団、15歳。昭和20年1月、あこがれの戦艦「大和」への乗組み。そして任務は測的所。海面から34メートルの高い場所。主砲照準を決定する役目。昭和20年4月7日、運命の日、「大和」は沖縄出撃。アメリカ戦闘機、大編隊の攻撃。7万3千tの巨艦が傾斜。気がついたら真っ黒な重油の海上に漂流。駆逐艦から救助のロープ。

九死に一生を得たのである。3009名が戦死、生き残った276名の一人が八杉さんである。



○水明書院主人文集
三原 温

昨今、生涯現役と呼んで元気な老人を讃える風潮があるが、久留米のお医者三原先生は、還暦後は悠々香り高く静かに瞑想、読書にもふけり、ものも書きたいと書齋建築、その名が「水明書院」この一冊は還暦記念文集。慌ただしく仕事一杯で逝った友人を思いやり、自分は「老後」という時間は楽しく持ちたいとお考えである。筑後川風景が撮影された表紙のカバー写真が美しい。つましく入念な製本である。写真家は弥永耕一医学博士。すばらしい腕前だと感心した。

受贈図書紹介⑥

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。あしからずご了承下さい。

自分史 我が半生の記	滝野 義雄	大阪市	六歳 槍ヶ岳に登る	虻川 圭實	筑後市
グズタレヤン放浪記	野間 大寒	鳥取県	小さな花	綽 真唯子	
風雪に耐えて	大谷 和雄	名瀬市	他人さえもいとおしく	宮城 顛	
戦争失明者の自分史	日本失明傷痍軍人会	高槻市	うちの子どうかしら	大城 清	
空からのらくがき	瀬戸真智子	広島市	命生る	樋口安癸次	八女市
飛びまわりスペイン	田中 直子	大阪市	続 余生を楽しく	山口 昌登	鳥栖市
50歳からまた始めた山登り	谷本 蟬丸	宝塚市	午後の大回廊	渡辺 齊	太宰府市
渡満の青春記	中島 重行	堺市	わがふるさと考	秋山 善文	太宰府市
私の奇跡	貝嶋太三郎	東京都	春華秋実	杉森 彬	立花町
わすれな草	内田 正子	京都市	手花火	鶴飼 礼子	
八十路を越えて	渡辺 繁子	松原市	人恋うところ	前川 静子	
成る	鳶巢 弘	川西市	花いちもんめ	前田三保子	
自分史	林 繁郷	下関市	あゝ紅の血は燃ゆる	八女中学34・35回	
癌告知のあとで	鈴木 章子		卒業記念文集	水洗国民小学校	
満月の夜	蓮尾加寿子		ガンよおごるなかれ	田村 誠一	大阪市
なに人のあなた	神戸 瞳		私のヤケアトロジー	内田 順子	名古屋市
私の趣味	田所 敏明	北九州市	みじかい俳句	馬場 元志	広島市
家族のきずな	末次 鎮広	筑紫野市	19才初年兵	佐藤 純夫	宮崎市
浦野隆夫の野球人生	浦野隆太郎	大分市	湖の月	恒川和左子	名古屋市